

## 取ってつけたような… —シドニーのミュージアムから

川口 幸也 (かわぐち ゆきや)

本館文化資源研究センター



パワーハウス博物館/  
オーストラリア

二〇〇八年一月末、わたしは真夏のシドニーを訪ねた。ミュージアムの展示が、どのような狙いに基づいてなされているかを調査するためである。

おもだったミュージアムを一通り見終わつたあとで、わたしはチャイナ・タウンにほど近いパワーハウス博物館に足を運んでみた。ここは、その名のとおり、もとは市内を走るトラム・カーの発電所だった建物を改装し、サイエンスとデザインの博物館として一九八八年にオープンした。展示は主として、一八世紀後半から現在までの、家具や衣装、陶磁器、装飾品などデザイン史と、機関車から自動車、飛行機、はては宇宙探査、原子力発電に至る科学技術の歴史で構成されている。一見して、幼稚園児から小中学生ぐらいまでを意識していることが見て取れる。

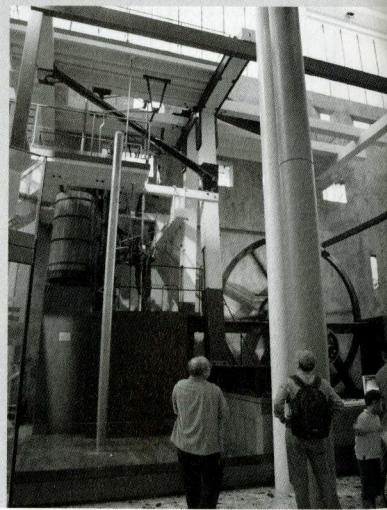
圧巻は、一八世紀後半、産業革命の原動力となつたワットの蒸気機関の再現展示である。高さ約二一、三メートル、しかもそれは実際に動く。そのちょうど前あたりに、一八世紀から一九世紀にかけてのイギリスの衣装と陶磁器のコーナーが拡がり、ウエッジウッドなどの食器類や、フロックコートに身を包んだ紳士とドレスを着た淑女が展示されている。世界に先駆けて産業革命を成し遂げ、一九世紀ウィクトリア朝の繁栄を築いた大英帝国の栄光の歴史を、そのまま我われは引き継いでいる…そんなメッセージが、一帯の展示からは伝わってくる。でも、その我われとは誰のことだ、と思わず半量を入れたくなるが、ここではそのことではなく、別の点を話題にしたい。

一八、一九世紀のイギリスは、たしかに世界に進出し、繁栄を謳歌した。しかし、底辺の人びと、とくに婦女子の生活は惨状を極めていたはずだ。そんなことを眩きながら、蒸気機関の壁の背後にある階段を一番上の四階まで上がっていくと、壁と壁に挟まれた狭い空間の一番端に物館、美術館の展示をわたしは思い返していた。そういえば、どこへいっても必ずアポリジナルをあつかつた展示があったが、そのなかには、前後の脈絡にあまりなじんでいないように見えるものもあつた。つまりは、取つてつけたような、不自然な感じを受けたのである。

たつた一回、それも数日間いただけでそう言い切るのはいかにも乱暴に過ぎるけれども、さまざまな歴史観や主張を含み得るテーマについて、過不足なく、かつ、あるストーリーのなかに位置づけて展示することの難しさを、あらためて感じたことである。

ひっそりと一八世紀における底辺の暮らし」と題する展示があつた。画家ホガースの有名な銅版画「シン横町」や「闘鶏場」の写真パネルが貼られており、「この時代、人びとは酒とどんちゃん騒ぎに明け暮れていた」という解説も付けられている。「一応は史実を踏まえている」という苦心の展示である。もちろん、「不都合な真実」にも目配りをしていられるというのは、それなりに良心的といえはいる。ただ、どこか取つてつけたような印象が否めない。それにたぶん、この場所では誰の目にも触れないだろう。帰る道すがら、シドニーでそれまでに見たすべての博

ワットの蒸気機関の再現展示



パワーハウス博物館



フロックコートの紳士とロングドレスの婦人

ウィリアム・ホガースの版画パネル

